

- 1 . 「見よ。
わたしは、わたしの使者を遣わす。
彼はわたしの前に道を整える。
あなたがたが尋ね求めている主が、突然、その神殿に来る。
あなたがたが望んでいる契約の使者が、見よ、来ている。」と万軍の主は仰せられる。
- 2 . だれが、この方の来られる日に耐えられよう。
だれが、この方の現われるとき立っていられよう。
まことに、この方は、精練する者の火、布をさらす者の灰汁のようだ。
- 3 . この方は、銀を精練し、これをきよめる者として座に着き、
レビの子らをきよめ、彼らを金のように、銀のように純粹にする。
彼らは、主に、義のささげ物をささげる者となり、
- 4 . ユダとエルサレムのささげ物は、昔の日のように、ずっと前の年のように、主を喜ばせる。
- 5 . 「わたしは、さばきのため、あなたがたのところに近づく。
わたしは、ためらうことなく証人となり、
呪術者、姦淫を行なう者、偽って誓う者、不正な賃金で雇い人をしいたげ、
やもめやみなしごを苦しめる者、在留異国人を押しつけて、わたしを恐れない者たちに、向かう。
・・・万軍の主は仰せられる・・・
- 6 . 主であるわたしは変わることがない。
ヤコブの子らよ。あなたがたは、滅ぼし尽くされない。
- 7 . あなたがたの先祖の時代から、あなたがたは、わたしのおきてを離れ、それを守らなかった。
わたしのところに帰れ。
そうすれば、わたしもあなたがたのところに帰ろう。
・・・万軍の主は仰せられる・・・
しかし、あなたがたは、『どのようにして、私たちは帰ろうか。』と言う。
- 8 . 人は神のものを盗むことができようか。
ところが、あなたがたはわたしのものを盗んでいる。
しかも、あなたがたは言う。
『どのようにして、私たちはあなたのものを盗んだでしょうか。』
それは、十分の一と奉納物によってである。
- 9 . あなたがたはのろいを受けている。
あなたがたは、わたしのものを盗んでいる。
この民全体が盗んでいる。
- 10 . 十分の一をことごとく、宝物倉に携えて来て、わたしの家の食物とせよ。
こうしてわたしをためしてみよ。
・・・万軍の主は仰せられる・・・
わたしがあなたがたのために、天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうかをためしてみよ。
- 11 . わたしはあなたがたのために、
いなごをしかって、あなたがたの土地の産物を滅ぼさないようにし、畑のぶどうの木が不作とならないようにする。
・・・万軍の主は仰せられる・・・
- 12 . すべての国民は、あなたがたをしあわせ者と言うようになる。

あなたがたが喜びの地となるからだ。」と万軍の主は仰せられる。

13 . 「あなたがたはわたしにかたくなことを言う。」と主は仰せられる。

あなたがたは言う。

「私たちはあなたに対して、何を言いましたか。」

14 . あなたがたは言う。

「神に仕えるのはむなしいことだ。

神の戒めを守っても、万軍の主の前で悲しんで歩いても、何の益になろう。

15 . 今、私たちは、高ぶる者をしあわせ者と言おう。

悪を行なっても栄え、神を試みても罰を免れる。」と。

16 . そのとき、主を恐れる者たちが、互いに語り合った。

主は耳を傾けて、これを聞かれた。

主を恐れ、主の御名を尊ぶ者たちのために、主の前で、記憶の書がしるされた。

17 . 「彼らは、わたしのものとなる。・ ・万軍の主は仰せられる。・ ・

わたしが事を行なう日に、わたしの宝となる。人が自分に仕える子をあわれむように、わたしは彼らをあわれむ。

18 . あなたがたは再び、正しい人と悪者、神に仕える者と仕えない者との違いを見るようになる。

説教

神さまをばかにし、「(カビの生えた余り物の)汚れたパン」や傷物のいけにえといった、いい加減なものをささげて自己満足していたイスラエルの民は、人に対してもいい加減に振る舞って生きていました。それで、神さまとの契約を捨てて、神さまを信じない異邦人と雑婚し、神さまの前に誓約して結婚した「契約の妻」である「若い時の妻」を勝手に離縁しました。神さまの戒めは「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」と命じましたが、神さまに対していい加減な態度で生きていたイスラエルの民はその命令をもばかにして最も身近でかけがえのない「伴侶」を容赦なく捨てました。それでいて、自分は伴侶を裏切っているが、自分の祈りを神さまが聞いてくださらないのは「なぜなのか」と「涙と、悲鳴と、嘆きで主の祭壇をおおって」いたというのですから自分勝手に都合のいい話です(2:13-14)。全く話にならない彼らに対し、神さまは彼らが妻になした無慈悲で強引で不法な「暴力」を報復し、それですっかり覆ってやるとまで言われます(2:16)。

このように、イスラエルの民が神と人をばかにして生きていた最大の原因は、礼拝とささげ物を管理する祭司が彼らをきちんと教育しないからでした。祭司は、人々に「真理の律法」を教育して、「多くの者を罪から立ち返らせ」て「祝福」をもたらさなければならないのですが(5-7)、それを怠りました。それで、人々は神と人に対して自分勝手にいい加減に生きて、神さまに呪われます。どんなに神さまに礼拝をささげても、神さまは喜びません。人の罪を贖い、赦し、罪人にいのちと祝福をもたらすはずの礼拝は、人々にいのちをもたらさない「呪われた」死んだ礼拝となってしまいました。それで神さまは、人間中心の自己満足の礼拝ではなく、神さまがお喜びになる真の礼拝がどのようなものであるかを教えなかった「汚れた」祭司たちの顔に「糞」をぶっかけて、彼らを「糞」と一緒に「投げ捨てる」と宣言なさいます(2:3)。人々が「糞」に等しいいい加減ないけにえをささげて勝手に自己満足している責任を取らせて、神さまが人々から受けている仕打ちを無責任な祭司らに報いて思い知らせるというのです。

しかし、こうした酷い神さまのさばきも、冷酷非情な神さまの情け容赦ないさばきであると言うよりは、むしろ実はその反対で、神さまを知らない彼らに神さまご自身を知らせるための必要不可欠なさばきと言うべきものでありました。この点、荒野の四十年やバビロン捕囚の七十年と同じ性質のもので、彼らが神と人に働いた不法を彼らに報いて体験させることで、要するに彼らに神さまがどのようなお方であるのかを知らせるのです。彼らが神さまを無視して自分勝手にいい加減に生きているのは、ひとえに神さまを知らないからに過ぎません。それで、神さまは彼らの自己中心を打ち砕いて神さま御自身を知らしめます。それで、続く3章では、直接神さまご自身がこの地に来ると宣言なさいます。

まずは主の「前に道を整える」使者を遣わしてから、神さまご自身が「突然、その神殿に来る」と言われます。その主は人々が「探し求め」「喜び待ち望んで来た」お方です(3:1)。その神さまとは、他ならぬイエス・キリストのことでした。キリストは今からおよそ二千年前に人となって生まれて世に来て、人の罪の身代わりとなって十字架で死に、復活して天に昇られた後、再び世の終わりに再臨なさいます。キリストが地上に来られる目的はただ一つ、それは罪人に救いをもたらすためです。神の愛を人々に知らせるためです。神さまは、先には祭司をこのためにお立てになりました。でも、祭司が充分にその機能を果たさなかつたので、神さまは今度は直接この世に来て、御自身の愛を明らかになさいました。人々が神さまを知ること、純粋に神と人を愛する者となるために、イエスさまは生けるまことの大神としてこの世に来られました。それで、マラキは「精錬する者の火」とキリストのことを表現します(2)。キリストは、「銀を精錬し、これをきよめる者として座に着き、レビの子らをきよめ、彼らを金のように、銀のように純粋に」します(3)。「呪術者、姦淫を行なう者、偽って誓う者、不正な賃金で雇い人をしいたげ、やもめやみなしごを苦しめる者、在留異国人を押しつけて、わたしを恐れない者」など罪を犯す者を律法に則って即座に罰します(5)。そして、彼らに神の愛を純粋に知らせて、彼らがどう純粋に神を愛するかを教えます。それで、彼らの信仰と愛は「金のように、銀のように純粋」となり、その結果、「彼らは、主に、義のささげ物をささげる者となり、ユダとエルサレムのささげ物は、昔の日のように、ずっと前の年のように、主を喜ばせる」に至ります(3-4)。かつては神を知らず、いい加減なものをささげて神さまに喜ばれず、礼拝所の閉門まで命じられました(1:10)、キリストが彼らの所に来て彼らを純粋に精錬するので、彼らは神の律法に命じられた通りの正しい「純粋」ないけにえをささげて神さまを喜ばせ、礼拝は本来の聖さといのちを回復して人々にいのちと祝福をもたらすものとなります。「昔の日のように、ずっと前の年のように、主を喜ばせる」のです(3:4)。

こうして、神さまは変わることなくイスラエルを愛し、御自身の民として養い、育て、たとえ罰することがあっても「滅ぼし尽くすことはなさいません(6)。それはあくまで親が子を教育するための愛の鞭であって、彼らに神の愛を知らせて、彼らがより純粋に神と人を愛するものとなるための「精錬する火」です。それで、神さまは具体的に悔い改めを呼びかけます。「わたしのところに帰れ。そうすれば、わたしもあなたがたのところに帰ろう」(7)。これに対し、人々は「どのようにして、私たちは帰ろうか」と問いかけます。すると神さまは答えます。「人は神のものを盗むことができようか。ところが、あなたがたはわたしのものを盗んでいる。しかも、あなたがたは言う。『どのようにして、私たちはあなたのを盗んだでしょうか。』それは、十分の一と奉納物によってである。」(8)神を知り、それまでの生き様を全面的に悔い改めた、神と人を愛する具体的な生き様として神さまが人々に教えたのは、意外にも「盗み」の罪を悔い改めて「十分の一」の献金をささげるようにとの教えでした。神さまからいただいた恵みを、感謝もせずに、自分が100%独占することは、「神のものを盗む」罪だと断罪されます。自分が所有する一切の物は神さまから恵みによっていただいたものであると本当に理解しているのであれば、その恵みに感謝して、アブラハム、ヤコブ、モーセらがそうしたように、全収入の10分の1を神さまにささげるべきではないのか、と言われます。そうしない者は「呪いに呪われている」とまで言われます(9節直訳)。

ここで言われるように、十分の一の献金は、律法が正式に与えられる以前から純粋に神を信じた者が神さまにささげた最も基本的な献金です。つまり、律法に命じられているから仕方なく渋々ささげるというのではなく、アブラハムにせよ、ヤコブにせよ、本当に神さまを知った者が、純粋に感謝して純粋に神さまにささげたのが十分の一の献金なのです。神さまを知らなければどんなに頑張ってもささげられませんが、神さまを本当に知った者ならば心から喜んで純粋にささげることができる献金こそ、十分の一の献金です。それは、喜ばしい、恵まれた、神さまに祝福された者だけがささげることを許された献金です。天の窓が開かれ、あふれるばかりの祝福を神さまが注いでくださっています。すべての国民が、しあわせ者と呼びます。箴言 31 章 28 節で「しっかりとした妻」を家族が「幸いな者」と呼ぶように、この上なく最高に理想的な幸せ者と呼びます。喜びの地です。マラキ 1:10 では「わたしは、あなたがたを喜ばない」と神さまから言われたのに、神さまから「喜ばれる者となる」というのです。17 節には「彼らは、わたしのものとなる」と言われます。「わたしの宝(財産、金銀財宝)となる」と言われます。「わたしは彼らをあわれむ(思いやる、同情する、助けてやる)」とも言われます。

こうなるようにイエスさまは来られました。私たちがきよめてくださいます。13-18 節にあるような不信仰を一蹴します。神の愛を示してください。神の愛で満たしてください。誰でも神の愛を知れば、神の愛に満たされます。神さまに愛されていることを知れば、満たされます。そうして、神と人を愛する者としてくださるのです。神さまに喜ばれ、受け入れられ、祝福され、全世界

の祝福の基としてくださいます。そして、世界中の人々に「しあわせ者」と呼ばれるようにしてくださるのです。このために、イエスさまは来られました。

ここに集われた兄弟姉妹のおひとりおひとりが、キリストを通して神の愛を知り、十分の一のささげ物をささげて、神と人を愛し、この罪の世に神の栄光を力強くあらわしていかれるよう、主の御名により祈ります。